

令和元年7月26日

二宮町教育委員会議録

(定例会・臨時会)

二宮町教育委員会

- 1 開会時間 9時30分
- 2 閉会時間 12時28分
- 3 教育長名 森 英夫
- 4 署名委員 渡辺 優子
- 5 教育長及び委員

出欠席	職名	氏名
○	教育長	森 英夫
○	教育委員 教育長職務代理者	岡野 敏彦
○	教育委員	原 道子
○	教育委員	山内 みどり
○	教育委員	渡辺 優子

- 6 出席者氏名
- | | |
|--------------|--------|
| 教育部長 | 黒石 徳子 |
| 教育総務課長 | 下條 博史 |
| 生涯学習課長 | 小島 孝紀 |
| 教育総務課指導班長 | 寺口 瑞紀 |
| 教育総務課指導班主幹 | 永井 貴幸 |
| 教育総務課指導班主幹 | 境野 朋美 |
| 教育総務課教育総務班長 | 竹本 直昭 |
| 教育総務課教育総務班主査 | 込山 久美子 |
- 7 傍聴者 10名
- 8 調製者 教育総務課教育総務班主査 込山 久美子

1 開会宣言

(教育長) 令和元年度7月定例教育委員会議を開催します。

2 署名委員の氏名

渡辺委員を指名する。

3 教育長事務報告

(教育長) 教育長事務報告を資料に基づいて行う。

(教育部長) 7月政策会議報告を資料に基づいて行う

(各課長) 各課の事務報告・事業予定について資料に基づいて説明を行う。

4 付議事項

(1) 議案第13号 令和2年度小学校使用教科用図書採択について

(教育総務課長) 令和2年度小学校使用教科用図書採択の内容について資料に基づいて説明。

(境野指導主事) 教科用図書の採択について、これまでの経過を報告。

(教育長) 各委員に種目ごとに諮る。

[国語の国語について]

○(岡野委員) 教科書会社による趣意書、調査員の調査結果、町の採択検討委員会の報告を元に、教科書を選ぶ基準を考えてみました。

国語については、言葉の重みをしっかりと体感出来ることが小学校の教科書で大切なのではないかと思いました。例えば文章を読み解く時に、主語を読み取ること、文章の裏にある情景を読み取ることがきちんと出来るかということ、また、読み取ったことから自分の考えを持ち、それを人に伝えることが出来るのかということ、そうした「言葉を通じた活動」がきちんと出来るかという点で比較しました。

まず、もっとも言葉の力にこだわっていると感じたのが「東書」です。キャラクターのコメントが控えめで文字が読みやすいのは「教出」でした。低学年の代表的な作品に「スイミー」があります。その多くが1年生で採用されていますが、唯一2年生の教科書に掲載されているのが「学図」です。「光村」は、低学年と高学年で文字の大きさが違って、成長を実感することができるように感じました。

言葉の大切さを扱う代表的な単元として2年生の「主語と述語」を比較してみました。この単元では『主語』は『述語』である」という単純な例文、「述語」に「修飾語」がかかっている例文、さらに「主語」に「修飾語」がかかっている例文と大きく3つのパターンがありますが、その3つを全て載せているのは「東書」と「光村」でした。修飾語と非修飾語の関係は分かりにくいこともあるので、「これはこれにかかるんだよ」ということ

を図解で示しているのが、「教出」と「光村」でした。また、主語と述語をしっかりと分かるように人に伝えよう、修飾語を使って分かりやすく伝える工夫をしようということを課題にしているのが「光村」でした。この点で光村の良さが光っていると思いました。

次に情景を読み取る単元では、物語の単元の入り方に注目しました。教科書を見開いた紙面の右端に「目当て」、左端に写真や挿絵があり、その下に冒頭の一段落だけの文章が載っていて「この物語はどんな物語か」という期待感を持たせている、そんな構成になっているのが「東書」と「教出」でした。

国語の物語の単元では、代表的な作品に「ごんぎつね」があります。「ごんぎつね」は、1年生から国語の勉強を続けてきた子どもたちが初めて出会う悲しい結末の物語であるため、その情景をどのように学ぶかという点で非常に重要だと感じました。その「ごんぎつね」の情景変化を子どもたちにどう問いかけているのかを比較しました。

情景や場面の様子が分かる表現を読み取ることに重点をおいて問いかけているのが「光村」でした。「ごん」と「兵十」の気持ちが徐々に変化して、次第に気持ちがすれ違っていく情景を捉える問いかけをしているのも「光村」でした。

「ごんぎつね」は物語の最後の一文が独特の終わり方をしますが、その最後の一文がどんな意味をもつのかという問いかけをされていて「学図」で特徴的で非常に良いと思いました。

次に、文章を組み立てる際の「起承転結」を学ぶ単元を比べました。「お礼の手紙を書こう」という自分の気持ちを書いてみようという単元を設定しているのが「光村」でした。自分の考えを起承転結で人に伝える工夫をすると学習は各発行者扱っていますが、「光村」の問いかけが一番直球で、良さが光っていると思いました。

一方、3年生で初めてローマ字の学習が出てきます。光村は大文字、小文字、発音や濁音などを網羅的に捕らえています。

「光村」の5年生には、コップという言葉の意味について学習する単元があります。言葉は、使い方によって誤解を生じることがあるものですが、その原因とそうならないようにする工夫を単元の中に盛り込んでいるということも含めて、言葉一つひとつを大事にして、人に伝えるための学習のポイントをつかんでいるのが「光村」だと思いました。

私は、国語については「光村」が一番良いと思いました。

- （渡辺委員） 私も国語は言葉を読み取ることが大切だと思っています。どのような場でどのような言葉を使うか適切に判断出来るか、言葉の醸し出す味わいを感覚的に捕らえることが出来るかを見てみました。それから、読書について、本を読むことの楽しさや奥深さをどう伝えているかも視点としました。

良いなと思ったのは「東書」です。「言葉の力」としてキーワードをまとめていて、何を学ぶか理解しやすくなっています。また、各学年に「本はともだち」というエッセイがあり、子どもたちでもよく知っているような人が、本に出会った喜び、感じたことを書いて、「子どもに読ませたいな」と思うものでした。

「光村」は物語を読み取るための発問がとても丁寧で、深く味あわせるような「ねらい」があると思いました。趣意書の冒頭にも「心を動かす、言葉が動かす」とあり、そういった表現にも、言葉の使い方に手を抜かない姿勢を感じ、良いと思いました。

- （原委員） 各発行者とも国語を構造的に理解させるための工夫がされていましたが、国語は言葉の学習なので「言葉をどれだけ大切にしているか」を発問の中から読み取ってみました。先ほど「ごんぎつね」を例に挙げていましたが、「東書」では、「ごんはどこに住んでいていつもどのようなことをしていましたか」という時間や場所や登場人物を確かめる発問になっていました。対して「教出」は「ごんと兵十はどんな人物でしょうか」とか「ごんの気持ちの分かる表現をノートに書きだし気持ちの移り変わりを話し合しましょう」という発問で、教育出版の方がより言葉の持つ意味合いに気づかせるようになっていました。

ただ、どの学年も、特に高学年になるにつれて「光村」は、文章の理解、そして理解をもとにした友達とのやり取りのときに言葉の持つ意味合いに注目させています。全体を通じて言葉の持つ深い意味とか微妙な味わいに注目させて文章の趣旨や登場人物の特徴などを読み取らせて子どもたちにやりとりさせ、その文が何を言いたいのかという本質に迫らせています。子どもたちの学習活動が言葉を中心に行われていくのが光村だと思いました。全体の挿絵などの色合い、本全体の味わいも「光村」は日本語の学びにふさわしい感じを呼び起こす作りになっていると感じました。私は「光村」を推したいと思います。

- （山内委員） 私も今挙げたご意見と同じ意見です。「光村」が良いと思います。

（教育長）「光村」の意見多数を受け、各委員に国語の国語「光村図書出版」について諮る。

委員全員異議なし。

〔国語の書写について〕

- （山内委員） 書写について、視点として、お手本になる字のふくよかさ、本そのものの体裁、軽さや扱いやすさ、どのような導入で子どもたちが書写に馴染んでいくのかということを見た時、「光村」と「学図」を推したいと思います。

水書きシートのページの工夫は「光村」が優れていると感じました。

他の科目もそうですが、新しい教科書には QR コードが沢山取り入れられています。

QR コードの分かりやすさも「光村」「学図」がよいのではないかなと思います。

- （渡辺委員） 書写は国語との関連も大事でしょう。また、美しい文字を見てあこがれる気持ちも大事にしたいと思います。

「東書」「光村」は解説やまとめがよくまとまっていると思いました。

検討委員会の意見の中に、「学図」は唯一半紙の原寸大の見本がついていることが良い

という意見がありました。それは良いなと思いました。

- （原委員） 見比べてみると「東書」の文字がきれいだなと思いました。けれど「きれい」というのは個人的な感覚もあると思いますので、現実的な視点ということで見ますと、国語の教科書との関係は大事だと思います。硬筆の文章に教科書の文章を使うこともあります。その点を考えると「光村」が良いと思います。
- （教育長） 国語と合わせた方が良いと思いますので、「光村」が良いと思います。小学校低学年に硬筆の授業をした経験があります。教科書と同じ文章を書くことは、子どもにとっても楽しみが増えることでしょう。

（教育長）「光村」の意見多数を受け、各委員に国語の書写の「光村図書出版」について諮る。

委員全員異議なし。

〔社会の社会について〕

- （岡野委員） 社会科は3つの着眼点で比較しました。一つ目は子どもたちが自ら社会参加してみようとする実践的な社会参画意識ということ、二つ目は歴史を単発のできごとの暗記ではなく大きな流れとして捕らえること、三つ目は情報産業の仕組みについて子どもたちがどう取り組んでいけば良いか考えていることです。

まず、一番目の社会参画についてです。教科書の中に地元の方のインタビュー記事をどのくらい取り上げているかを具体的に数えてみました。インタビュー記事は、子どもたちに実践的な話を伝えるために大切なものです。それぞれの教科書ともそれなりのインタビュー記事が載っていますが、その数が突出しているのは「教出」でした。単に数が多いだけでなくその中身もしっかりしていると感じました。

歴史については、代表的な時代として戦国時代について比較しました。織田信長、豊臣秀吉、徳川家康の3人を歴史の上で並べた時、それぞれがどんな考えで天下を取って世の中を治めていったかという大きな流れをどう考えているかということと比較しました。

「東書」は、信長と秀吉の二人に注目していて、単元の後半では子どもたちに「どう違うか」を子ども同士でパネルディスカッションをさせる、対話的な学習に重点が置かれています。「教出」は、信長・秀吉・家康の3人を並べて、それぞれの政治、拠点、外交などを比較して大きな流れを読み取る構成になっています。これは、子どもたちの考えるプロセスを重視しているように感じました。「日文」は、3人の戦術や考え方の違いに着目して、それぞれがどんな役割を演じたかを考える思考重視になっています。時代の流れを読み取る視点では「教出」と「日文」が良いかなと思いました。

最後に、情報産業との関わりについてですが、情報がどうやって生み出されるか、ニュース番組はどのように作られているかというところから入って、最近のインターネットを通じた情報技術、情報との関わりにつながる構成になっています。その単元

の中で、自分がどうかかわっていくべきかを考える位置に違いがありました。

「東書」は、単元の最後に「情報活用宣言」というものがあって、自分が今の情報技術に対してどうするのかを自分自身でチェックをするようになっていきます。

「教出」は、単元の途中で、伝える立場と受ける立場の違いという視点で自分の関わり方を考える構成になっています。単元の最後は「これからの情報通信技術はどう変わると思いますか。そこで新しく課題になりそうなものは何ですか」と将来に向けた課題を設定しています。子どもたちに未来志向で考えさせていることは、すごく良いと思いました。

「日文」は情報社会、インターネット技術の良いことと悪いことが背中合わせになっていることに注目して、その二律背反に対して自分がどう取り組むかを課題としていました。

「教出」と「日文」が良いかなと思いますが、この三つの視点で見ると「教出」が際立っていると思いましたので、「教出」を推したいと思います。

- （渡辺委員） 私も「教出」が良いと思いました。今後ますます多様性が重視される社会になっていく中、その社会をどう作っていくか様々な角度で見ることが大事になります。過去の事象においても、現代の課題についても、結論を言い切らず子どもたちが考えるようになっている、これからの社会を作っていくのは君たち一人ひとりだよと促していく視点が見えるか、そういうところを見ていきました。

「教出」は、憲法改正の論議についても、判断をする主役は国民ひとりひとりだよと記述があり、丁寧にまとめています。多文化共生ということについても、川崎市には、韓国籍の方が多く住んでいる地域がありますが、「川崎にこういうまちがあるよ」と具体的に取り上げています。3年生から社会が始まりますが、3年生くらいの年齢だと、身近な地域のところから学習に入っていけるのが良いと思います。「教出」の図書は神奈川県のことを具体的に取り上げていて、教材が身近で、学習に入りやすいと思いました。

- （教育長） 「教出」がよいという意見が多いようですが、いかがでしょうか。
- （山内委員） 視点として、子どもたちにどういう大人になってほしいかということ、教科書を選ぶ時にはいつも考えていますが、3つの基本の柱として、知識・技術を貪欲に自分に取り入れるということ、自分の考えを判断して思考力をもって発表出来ること、他者の言うことをよく聞き、認め、多様性を認めながら協同していくことがあります。色々なものの根底になるものとしては、知識などを自分で身につけることをどう刺激するかだろうと最近の子どもを見ていて思います。

そうしたところで、社会科の教科書では、「東書」を推したいと思っています。具体例として、拡大する西之島を取りあげていますが、噴火して拡大していく様子、今後どうなっていくでしょうということを端的に具体的に掲載しています。身近にメディアが取り上げているニュースを扱っていて、とても知識欲を刺激して、良いと思いました。

- （原委員） 社会科は各発行者のカラーが特に高学年では強く出ていると思いました。生活科を卒業して、社会科を初めて勉強するわけですが、教科書を開いたときに身近な地域

を取り上げていることはとても大事な要件だと思います。「教出」は神奈川をよく取り上げていて、よく知っている場所、行ったことのある所が出てきます。先生としても教えやすいと思いました。

高学年では、社会の仕組み、日本の仕組み、または世界の仕組みということについて学習しますが、今後広い世界の中で生きていく子どもたちには偏った見方ではなく多面的な視点を持たせる記述であってほしいと思います。

例えば領土問題をとってみますと、各発行者とも「こういう問題があります」と取り上げているのは共通していますが、「教出」は唯一「隣の国と仲良くしたいね」という吹き出しでの記述があります。ここに注目させることで、子どもが大人になってから、改めてこうした問題と向き合い、いろいろな国とどうかかわっていくのか、どうしたらよいのだろうかと考える時の、すごく大事な視点を持てます。そこを教育出版は伝えていると思いました。

また、憲法について、憲法と国の仕組みとのかかわりをその関わりごとに憲法の条文を載せているのが「教出」で、非常に大事なことを教えている教科書だと思います。

- （教育長） 「東書」は分冊になっているものがありますが、その点についてはどうでしょうか。
- （渡辺委員） 分冊は軽くなってよいのですが、検討委員会では「実際の授業では前の単元を振り返ることもあるので、一冊になっている方がよい」という意見がでていました。

（教育長）「教出」の意見多数を受け、各委員に社会の社会の「教育出版」について諮る。委員全員異議なし。

〔社会の地図について〕

- （渡辺委員） 来年度、3年生から地図の学習が始まると聞いています。社会も3年生から始まり、地図も3年生から始まるということで、「地図って何だろう」とか「地図の見方」、また、方位や地図記号を習わない内から地図帳に触ることになりますので、見方・使い方が丁寧かどうかを見たいと思いました。見やすさ、色のバランスなども見たいと思いました。
- 「帝国」のものが、最初の方で「地図の見方」を丁寧に伝えていて良いと思いました。
- （岡野委員） 正直かなり悩んだところです。見やすさという点では「帝国」なのですが、「東書」は低学年も入りやすいのかなと思いました。資料としての情報量が多いのが「東書」だと思いました。地図は1年間使って終わりではなく、その後も長く使っていくものなので、資料としての充実度は大事だと思います。平面の地図と丸い地球儀を比較していることや、日本の世界遺産を掲載していることなどが良いと思いました。

しかし、全体の見やすさという点「帝国」だなという印象を受けました。

- （原委員） 色使いがやさしく見やすいのが「帝国」だと思いました。地図は、眺めてわくわく感を得るといふか、行ってみたいなと思うとかその土地への興味を持つ、大事なツールだと思います。その時、きれいだなと思えることは大事な要素です。地形や地名を読み取りやすいのも「帝国」だと思いました。もうひとつ、国の名称が正式名で掲載されているのは「帝国」でした。「東書」は正式名を括弧書きしていました。統一して正式名で書かれているのは「帝国」でした。通称は耳慣れています、この時期の子どもたちには正式なものを掲載するのは大切なことではと思いました。○（教育長） 「帝国」というご意見が続きましたが、いかがでしょう。
- （山内委員） 私も「帝国」が良いと思います。
- （教育長） 私も見やすさを考えると「帝国」が良いと思いました。

（教育長）「帝国」の意見多数を受け、各委員に社会の地図の「帝国書院」について諮る。委員全員異議なし。

〔算数の算数について〕

- （原委員） 1、2年生は数の概念を身につける段階ですが、「啓林館」が良いなと思いました。絵がはっきりして見やすいこと、徹底して何回も数を数えさせ、確認をさせ覚えさせている、そうして数の概念を、先を急がず丁寧に教えていると感じました。
筆算の段階になると「大日本」が一番見やすいと思いました。位ごとの色分けをしている、「たてる」とか「おろす」という段階を丁寧に教えています。
時間と時刻の単元になると、一番生活に密接した、子どもに身近な形で取り上げているのが「啓林館」でした。
円柱や三角柱の体積のことが検討委員会でも話題になっていました。底面積が大事ですが、「啓林館」は前の学年で学習した「円の面積」からの導入になっています。他の教科書では、円柱を縦に切って行って、円周に注目させていますが、そこは分かりにくいかなと感じました。既習の学習とのつながりということを考えると「啓林館」が良いだろうと思います。
「啓林館」は発展問題が難しいのですが、友達との学び合いの中でどうだろうこうだろうと子どもたちがやり取りすることが出来て、いろいろな考え方に気づくよい学習になると感じました。
- （山内委員） 私は算数が苦手でしたが、「どうして苦手になったのか」と振り返る時、小学生時代の基礎的能力が身につけていないのではと思います。そうした視点で、今の子どもに、基礎的なものを、楽しく、また「出来た」と子どもたちの喜びになる形で取り上げている教科書はどれだろうと思って見ると、良いなと思ったのは「東書」か「教出」でした。検討委員会に出ていた現場の先生の使いやすさという点でもその二者が良いよう

です。繰り返しがしやすいこと、つまずきをさかのぼった時に出来るだけ細かい見方をする工夫が出来ているのが「東書」か「教出」だと思います。

- （岡野委員） 結果としては「啓林館」が良いと思いましたが、「東書」と「教出」も捨てがたいと思いましたが。三者を比較すると、算数としての基礎基本を単元としてきちんと設定しているのは「啓林館」だと感じました。

算数は、どこに着目してどんな戦術で考えていくか、計算するという作業の最小単位を身に着けること、つまり「ここだけは押さえておけば」ということを身に着けることが大切なことだと思います。問題が複雑になっていくと「ひとつ前のこれが出来ていない」「さらに前のここが出来ていない」となりますが、根っこの部分をきちんと押さえていくことが重要なことだと思います。

子どもたちがつまずきやすいことという、いくつかあるでしょうが、例えば、割り算の筆算などを比較した時、立てる、掛ける、引く、降ろすという作業を徹底的に繰り返しているのが「啓林館」です。整数同士の割り算で桁を揃えることの大切さは、その後の少数の割り算につながっていきます。割り算の筆算は、縦書きで桁位置を揃えることがポイントであると思います。啓林館の筆算は横書きなのですが、桁位置をハイライトすることで桁位置が理解しやすいように工夫されています。

割合の問題なども、全国学力・学習状況調査の回答状況で低いところですが。割合の三用法には、割合イコール、比較する量イコール、元にする量イコールの3つの公式が登場しますが、これら3つを別々の公式として覚えることが大事なのでなく、これらが互いに行ったり来たり出来ることを子どもたちに実感してもらうことが大切だと思います。ほとんどの教科書は3つの公式が別々のページの違う高さの位置に記載されているのですが、単元の中で1ページにこの3つを縦に並べて比べ、本質的な構造が同じであることをと伝えているのが「啓林館」でした。

場合の数、順列と組み合わせですが、「啓林館」以外の教科書では、順列が先に出てきます。ここでは、先にあらゆる場合の数を考えて、まず全体像を理解することが大切だと思います。場合の数を先に出てくる「啓林館」はすごい視点だなと思いました。

代数だけでなく幾何学も大切です。幾何学の合同の条件についてみてみました。図形がぴったり重なる要件は、ずらす・まわす・裏返すと3つありますが、その3つを全てきちんと掲載しているのは「東書」「学図」「啓林館」でした。

4年生では、図形を表す時に「三角形ABC」という表現が初めて出てきます。そこで、図形中のAの後に「(エー)：かっこえー」と読み方まで添えて丁寧な書き方をしているのが「学図」「啓林館」「日文」でした。

ここで「合同な三角形を描いてみよう」という単元があります。元の三角形には3辺の長さや3つの角度の6つの情報がありますが、これら6つの情報を全く書いてないのが「大日本」「啓林館」「日文」です。「合同な図形」を描こうとする時、角度や長さの情報がなくてもコンパスや定規を使って描き写すことが出来ることに気がつくことが、ここ

で大切なことですから、角度等の情報は要らないものだと思います。

次に、合同な四角形を描こうとする時、四角形を三角形二つに分割して描く方法を示しているのが「啓林館」です。他の教科書では、四角形の写しかたは四角形で別に説明しています。「合同な三角形を書き写す」というひとつ前のことを応用する構成になっているのが「啓林館」でした。

低学年が入りやすい教科書ということも大事で、「東書」のキャラクターは子どもたちに受け入れやすいものだと思います。しかし、算数の基本がきちんと設定されているのは「啓林館」だと思います。

- （教育長） 学習のパターンがそろっていると先生方にはやりやすいと思いますが、「啓林館」が良いのかなと思いました。
- （山内委員） 私も九九の扱いなどは「啓林館」が良いと思いました。

（教育長）「啓林館」の意見多数を受け、各委員に算数の算数の「新興出版啓林館」について諮る。

委員全員異議なし。

〔理科の理科について〕

- （渡辺委員） 生活から理科になると、課題を科学的に解決することを学んでいくようになるのかなと思います。理科については、学んだことを自然の現象に当てはめた時に「なるほど、そうか」と気がつくことや、実生活に応用出来る視点を大切にしたいと思いました。例えば、4年生で「雨水の流れ」を観察して水の性質を学びますが、雨水の流れから自然界の山・川・海の水の流れに意識を向けさせている教科書が数者ありました。また、同じ4年生で冬の星座について、オリオン座などの星座を学びますが、北斗七星とカシオペア座から北極星の位置を計り、そこから、屋外に出た時に方位が分かる、そこまで掲載しているところと掲載していないところとありました。

また、3年生になりますが、それまでに朝顔や野菜を育てる経験をしています。植物のサイクルを学ぶことになります。「種を蒔いて芽が出て花が咲いて実がなる」というサイクルが決まっていますよと明確にうたっているか、学びが実生活に繋がる形で出てくる教科書かということを見た時、「学図」「教出」「啓林館」は発展的に出ていると思いました。

5年生では発芽の実験があります。水と空気と温度が発芽に必要な条件ですが、「教出」では、「水は必要だけど水を入れすぎると発芽しない」というように、見通しどおりに行かず「何が原因か」と投げかけて次の実験に移っていきます。この流れが丁寧でよいと思いました。

一方「啓林館」も高学年になると、視点が幅広くなっています。振り子の実験では、算数で習う計算を使うと良いというように、他の教科と関連したことも出てきます。実際の

明石大橋の建設に振り子の原理を応用したという記述が発展的に出てきます。

低学年から高学年まで順に見ていきますと、3、4年生あたりでは「学図」が良いかなと思いましたが、6年生まで全体を見ると「教出」「啓林館」が、バランスが良いと思いました。

○（岡野委員） 理科は「啓林館」が良いかなと思いましたが、理科はまず、「なんでだろう」という根本的な興味を引き起こすことが出来るのが大切でしょう。次に「そういうことか」と結果にたどり着けること、さらには「だったらこんなことも出来るのではないか」と次のスイッチを押すことが出来るかがポイントだろうと思います。

入りやすさというと、表紙や表紙をめくった見開きに、各発行者の工夫を感じます。実験する子どもを表紙にして、その裏に「なんで」というかなり印象的なダイナミックな写真を取り入れているのが「東書」です。

「大日本」は、4年生か5年生でシャーロック・ホームズの言葉を取り上げていて「見ていることと観察することは根本的に異なる」というメッセージが書かれています。これは理科の本質的なことでもあって、そういうところも良いなと思いました。

具体的な実験内容についても、もちろん各発行者工夫していますが、秀でているのは「啓林館」だと思いました。

例えば3年生の「太陽と影」です。「時間が経つと影の向きが変わったね。なぜ影の向きが変わったのかな」と丁寧に問いかけて、棒を立てて影の動きを観察する実験と、影の方角を方位磁石を使って確認する実験の二つの実験があります。そこに丁寧にページを割いているのが「啓林館」と「教出」でした。

水が高いところから低いところに流れる実験では、グラウンドの勾配を調べるのに、発泡スチロールのトレイとビー玉を使っています。他の教科書では長い雨どいを用意したりしていますが、身近なもので効果的な実験をやる視点が大事だと思いました。

高学年では、発電の仕組みの実験がありますが、実験結果の記入の方法や、モーターと発電機は逆の関係だよと、先につながる情報を入れているのが「啓林館」でした。「発光ダイオードがなぜ長く光るのか」という、そもそもの仕組みを考えると、考える要素を単元の中に盛り込んでいる印象を受けました。

特に特徴的だった実験が先ほども出ました振り子の実験でした。振り子の周期に影響する因子は振り幅・振り子の重さ・糸の長さの三つが考えられますが、その中で糸の長さだけが周期の変化に影響します。多くの教科書が糸の長さ、振り幅、振り子の重さの順で実験する構成になっていますが、唯一「啓林館」だけは、糸の長さの実験を最後にしています。これは、効果がある実験を最後に持つことで、子どもたちが達成感を味わうことができる意味で、実験順序の巧さが際立っていると思いました。こうしたことが他の単元でもあり、達成感を持って終われることが非常に良いと思いました。

単元の大きな流れが教科書の冒頭に出てきますが、「問題を見つけて、調べて、結果を見て、まとめる」さらに「その次」につながるコメントが書かれているのが「教出」と「啓

林館」でした。「啓林館」の趣意書を読むと、「理科は初めて出会う科学の場です」、「結果と結論の違いは大切です」と書かれていて、理科の本質に迫る構成になっています。

単元の合間には、ノーベル賞を取った科学者からのメッセージがあり、そのクオリティが高いなと感じました。理科の実験にこだわって教科書を作っていると感じる点で「啓林館」が良いと思いました。

- (山内委員) 「結果を予測し、実験し、検証してまとめて振り返る力」を理科では身につけてほしいと思います。今までに挙がりました意見に加えて、「啓林館」は実験をする時の約束や準備を「髪の毛をしばる」というようなことまで細かく丁寧に書いて、良いと思いました。

- (原委員) 生活科からの流れで、日常生活の視点から入りやすいものという意見が検討委員会で出ていました。「大日本」は入りやすい教科書だと思いましたが、ひとつ気になったのは、実験した時の結論が出てくるのが割合早いかなということでした。もう少し色々試して、子どもたちの意見を聞いて、結論を出す作りだと良いのにと感じました。

理科の場合には、興味関心から「なぜだろう」「どうやって調べるのだろう」というところから「ああそうなのか」というところに行く教科書だと思います。

まず、最初に興味関心を動かせるのは、私も写真だと思いますが、例えば物が燃える仕組みについて、日常生活と関連した視点ということで見ますと、「大日本」ではケーキのろうそくの炎や提灯を挙げています。「啓林館」では、飯ごう炊飯のかまどでした。どちらが子どもにとって、「より物が燃える仕組みに辿り着くことが出来るか」と考えますと、「なぜ下が空いているのだろう」ということに注目をさせている「啓林館」の写真は、その後の流れが教師として見えました。空気の出入りが必要なことを写真にしっかり結び付けています。ケーキの上のろうそくでは分かりにくく、提灯は身近ではないなと感じました。他の写真もそうですが、「啓林館」は、興味関心を持たせている写真で良いなと感じました。

また、大地の作りの単元でも、問題を押さえて予想をする、理科的な思考を育てる流れが、「啓林館」はよく押さえられていると感じました。

- (教育長) 若い先生が使いやすい教科書という観点で見た時、流れが出来ているのが「啓林館」だと思いました。

(教育長)「啓林館」の意見多数を受け、各委員に理科の理科の「新興出版啓林館」について諮る。

委員全員異議なし。

[生活の生活について]

- (山内委員) 各発行者ともたいへん力を入れて作っておられると感じましたが、その中で「東書」を推したいと思いました。1年生で春夏秋冬を詳しく考えて、2年生で校外へ

出て行くのですが、その流れがとても自然で、小学生になった子どもが無理なく生活の環境の視野を広げることが出来、良いと思いました。また、校外に出た時に、町の安全というところを取りあげています。津波のことなども取りあげていますし、交番のことや、街の中の表示のことを1ページでまとめて取りあげていて、子どもたちに分かりやすい作りです。保護者も教科書を使って子どもと一緒に話が出来るようになってきていると思いました。

本の作りとして、表紙やイラストにもわくわく感がありますが、そのわくわく感の中に、しっかりと道具の使い方、片付けの仕方といった習慣づけをする意図も盛り込まれていますので「東書」が良いと思いました。

- (原委員) 非常に決めかねた、という感がある教科書です。どの発行者も非常に特長があり、子どもたちが楽しく学べそうです。その中で違いを見ていくと、「東書」はインクルーシブの視点をととても大事にしていると思いました。車椅子の子どもが出てきたりと、どの発行者もインクルーシブの視点を取り入れたりしていますが、「東書」が一番強く現れていると感じました。

「学図」は写真が非常に多いですね。観察のポイントも分かりやすく、先生も使いやすいそうです。

これは「啓林館」だけでしたが、趣意書によると、ザリガニなどの外来種は取り上げていないということでした。自然物を多く取り上げる教科の中で生態系への配慮がされています。また、観察をする時に、虫へのアレルギーがある子どもへの配慮についても触れていて、安全に楽しく、そして社会的にも意味がある観察をすることが出来ますので、良いと思いました。

「啓林館」であれば、3年生の理科とのつながりも滑らかになると思います。

- (渡辺委員) 「大日本」は表紙に凹凸があるという特徴があって、手に取りやすいと感じました。秋の色を取り上げる際に最初に白黒の写真を出して、その後カラーの写真に掲載しています。視覚的なインパクトがあって、面白いと思いました。

1年生では朝顔を育て、2年生では野菜を育てます。その中で育てて、食べるまでの経験をしますが、その次にどうつなげるかという、「啓林館」「東書」は、「秋の野菜を育ててみよう」とか「今度は種から育ててみよう」、発展的に興味の広がりを持たせていて、良いと思いました。

生活科のねらいの中では、「まちへ出て行く」「自分の暮らすまちを知る、人を知る」ということが、これからの地域の中で暮らす子どもたちにはとても大事です。知るだけでなく、人とのコミュニケーションを取る組み立てを取り入れているところで「東書」「啓林館」が良いと思いました。四季折々の体験活動を通して、様々な人とかかわる、つながる、支えあうということを感じられるか、また、五感を使うこと、センスオブワンダーとも言いますが、「神秘さや不思議さに目をみはる感性」をたくさん味わうことができるかについては「東書」の見せ方が良いと思って、最終的には「東書」が良いと思いました。

○（岡野委員） 生活科は社会科と理科へ繋がっていきます。社会科は「将来どう生きていくか」ということにつながりますし、理科は科学の入り口ということで色々なものに興味を持つことにつながるのかなと思います。

写真が醸し出す力ということを見ると「東書」の写真は大胆、ダイナミックで良いと思いました。バツが手前にアップで大きく、子どもたちが写真の奥にいるものなどは印象に残ります。この点は、生活科に限ったことではありませんが、大事なところだろうと思います。

○（教育長） 観察カードの使い方をしっかり書いているのが「東書」で、「東書」が良いなと感じています。

○（原委員） 「啓林館」が良いと言いましたが、わくわく感は「東書」の方があると思います。

（教育長）「東書」の意見多数を受け、各委員に生活の生活の「東京書籍」について諮る。委員全員異議なし。

〔音楽の音楽について〕

○（渡辺委員） 二者の教科書がありますが、鍵盤ハーモニカについて見ました。幼稚園や保育園でも鍵盤ハーモニカを触ることはあると思いますが、本格的には小学生からということになると思います。「教出」は、原寸大で鍵盤の写真を載せています。指使いなどがその上で練習出来て良いと思いました。

3年生になるとリコーダーがありますが、「教芸」は「低い音を出すにはホースを吹くようにしたら良いよ」というアドバイスがあって、具体的で分かりやすいと感じました。

「教出」は、巻末に指使い一覧があって、使いやすく便利だと思いました。

4年生では地域で伝わる音楽という単元があります。「教芸」は富山の民謡からスタートしています。二宮の子どもたちにはちょっと遠い場所なのかなという印象を受けました。一方「教出」はソーラン節から始まって、お囃子を経て世界のリズムに展開していきます。お祭りの時に太鼓をやっている子どもが二宮町には多くいますから、身近に感じられるだろうと思いました。

全体を通して「教出」が良いだろうと思います。

○（原委員） 新しい教科書は、QRコードが多く出てくるようになっていますが、両者を比べて「教芸」のものが良いと思いました。演奏の効果を確かめながら楽しむ器楽の学習ですとか、日本の歌、新しい歌、世界の歌と色々歌を楽しむという点では、「教出」は、バランス良く載せていて良いと思いました。また、音符の読み方など基礎を確認出来る良さも感じました。「教芸」の面白さも魅力があると思いました。全体では「教出」が良いと思いました。

○（山内委員） 音楽は個人の知識技能の修練、自分で判断すること、他者と協同すること、

その3つ全部を身に付けるのにとっても適した科目だと思っています。授業の中でそれらを自然に身につけていけるかという視点で見えていきました。

鍵盤ハーモニカについて、先ほどもありましたが、段階を追って、丁寧な教え方をしているのが「教出」だと思いました。教出では、2年生で単音から和音、ハーモニーに触れており、詳しく、且つ、感性を刺激する書き方がされています。オーケストラの紹介も、わくわくさせる扱い方をされていて、きれいで分かりやすいと感じました。1年生から6年生までひとつの歌をだんだん重ねて合唱をするというものが、最後に掲載されています。だんだん難しくなって行って、他の学年とハーモニーする喜びが感じられることも良いなと思いました。

英語の歌の掲載がたいへん増えていますが、英語の発音のカナを振ってあります。カナは「目安」であるという風に書いてありますが、日本語にない発音の表記が今後どうなっていくのかなということに、興味を持ちました。

全体的には、「教出」を推したいと思いました。

(教育長)「音楽」の意見多数を受け、各委員に音楽の音楽の「教育出版」について諮る。委員全員異議なし。

[図画工作の図画工作について]

○(原委員) 二者の特徴がずいぶん違うなと思いました。検討委員会では、「開隆堂」は全体が少しごちゃごちゃしているという発言があったようです。また、出来上がりのイメージがつきにくい子がありますが、出来上がりははっきり見えるほうが良いということで、「日文」が推されているようでした。

しかし、子どもは豊かな発想を持っていて、それを引き出すのが図工の時間だと思えます。「お手本のような作品が出来れば良い」ということではなくて、自分が持っている力の範囲で、自由に作って良いんだよというメッセージを伝えているのは「開隆堂」のごちゃごちゃ感だと思いました。カラフルで色々な作品を掲載していて、どれをどのように使うか迷ってしまうかもしれませんが、そこがまた図工で伸ばしてくセンスや個性を刺激する教科書だと感じました。「開隆堂」を推したいと思えます。

○(岡野委員) 想像力をかき立てるという点が大事だと思いますが、「日文」に良さがあると思いました。見開きのページの写真が、ダイナミックでわくわくして、想像力をかき立てる入りやすさがあると思いました。紙面にずらっと電車が描かれているのは、特に興味をそそられます。道具の使い方なども丁寧に書かれています。二者それぞれに良さはあると思いますが、「日文」が良いと思いました。

○(山内委員) それぞれの良さがあると思いました。「日文」は用具の説明、安全指導がとても丁寧に扱われていると思いました。

「開隆堂」は、その単元でこれから使う道具をまとめてページの左上に載せていて、使

うものを予め用意するしつげに配慮されていると思いました。

子どもたちには、小さくまとまらずに自分のオリジナリティを発揮することを、身につけてほしいと思います。我が町の子どもたちは、そつなくまとめるというか、踏み出さない・はみ出さない、そういう雰囲気の子が多いように感じることもあって、図画工作の時間では、あんまりお手本を見せすぎないで、お手本を模倣しようとしなくて、オリジナリティを伸ばせると良いと感じています。その上で友達と、多様性を認めあうこと、そのようなパワーを「開隆堂」の作りから感じます。また、表現について、例えば「どっしりとした木を描く時、どっしり感を強調している」所など「開隆堂」の表現が良いと思いました。

- （渡辺委員） 「開隆堂」はゴールが見えないように思えて、ごちゃごちゃしているように受け取れるのかもしれませんが、わくわく感をもてる授業になると良いと思います。

（教育長）「開隆堂」の意見多数を受け、各委員に図画工作の図画工作の「開隆堂出版」について諮る。

委員全員異議なし。

〔家庭の家庭について〕

- （原委員） 「持続可能な社会を実現するために」という学習がありますが、取り上げているものがはっきりと違っていました。「東書」は消費者教育、「開隆堂」は環境教育です。比較した時、この学年での学びの切り口としては、環境教育の方が良いなと思いました。そういう意味で「開隆堂」が良いと思いました。

「開隆堂」は趣意書で「ストーリー性のある教科書」と言っています。5年生6年生のつながりがかなり明確にあって、5年生で学んだことを6年生で発展させていて、良いと思いました。また、ともに生きる地域の社会を一単元でまとめて、共生社会の実現ということをやっている点も良いと思いました。

「東書」は、左利きの人ののはさみや包丁の使い方ですとか、色々な配慮がしっかり書かれていることがところが良いと思いました。また、話し合おう深め合おうということで、「みんなにもらった意見を大切にしながら、色々な『私の生活』があって良いよね」というメッセージを感じたのが「東書」でした。

どちらもよいと思いました。

- （山内委員） 今のご意見に近い視点で見えていたと思いますが、私は「東書」が良いと思いました。SDGsを子どもたちにどのように植え付けていくかということ、自立に向けた生活のさせ方などが、今の子どもたちの置かれている状況、日常生活に即しており、生活のリズムにあっていると思いました。
- （岡野委員） 悩みましたが、実践的という意味では「東書」が良いと思いました。家庭科は衣・食・住という視点で比べてみました。まず「衣」で「東書」は、夏を涼しく

過ごす単元と冬を温かく過ごす単元の並びが夏冬の順になっているのが良いと思いました。ボタンのつけ方も糸の通し方も写真がわかりやすく、作業の説明も丁寧でした。

読み物の良さとして、「開隆堂」は写真がとても分かりやすいと感じました。背景色と布の色の組み合わせが工夫されていて、コントラストがはっきりしていて、布と糸がはっきり分かるようになっています。

二番目の「食」について、「東書」は「まかせてね、今日の食事」という単元があって、自分で率先して夕食を用意してみようとする気持ちを盛り立てる内容でした。掲載されているメニューも具体的で実践的だと感じました。

「開隆堂」は、見開きの横並びレイアウトで掲載していて、開いたままページをめくらず使える良さがあるなと感じました。

「住」については、掃除の道具とやり方を非常に丁寧に説明しているのが「東書」でした。「開隆堂」の整理整頓の写真もとても分かりやすいのですが、身近な実践力は「東書」かなと思いました。

○（教育長） 使いやすさや段取りの良さは「東書」にあると思いました。

（教育長）「東書」の意見多数を受け、各委員に家庭の家庭の「東京書籍」について諮る。委員全員異議なし。

〔体育の保健について〕

○（渡辺委員） 五者ありますが、発展的な内容はそれぞれ違いがあると感じました。

まず、「光文」は導入が良いと思いました。健康、保健ということが大人と比べて子どもには実感しにくいところもあると思います。「光文」は、導入に4コマ漫画もあり、子ども目線で入りやすい作りになっていました。また、5、6年生の「心の健康」の中では、「笑うって良いんだよ」とか「ストレスとの付き合い方」など色々な視点の情報が挙がっているのが分かりやすく良いと思いました。

これから共生社会を目指す上での大切な視点ということで、ヘルプマークや白杖のことに加えて、今増えている性についての悩みをしっかりと記載していて、これからの教材として良いと思いました。「光文」と「文教社」が性についての悩みを扱っていました。「文教社」は、他に、アルコールの授業でノンアルコールビールは良いのとか薬物乱用の入り口になるゲートウェイドラッグの記述があつて良いなと思いました。「学研」は、困った時の相談窓口が紹介されているところが良いと思いました。

検討委員会での意見に、これからの時代小学校高学年でも薬物乱用についての知識があった方が良くはないかとありました。「東書」は、薬物乱用の害について大きく載せていました。それから、ストレスカレンダーというものがあつて、ちょっと面白いなと思ったのですが、1週間の予定を書き出して「自分はここでストレスを感じそう」と事前に把握すると対処出来るよという記載がありました。

迷うところもありますが、「光文」「学研」「東書」が良いと思いました。

- (山内委員) 「学研」を推したいと思います。選ぶ視点として、身体の変化に一番悩む年頃ですので、どのように取り扱っているのかを見ました。今まで知らなかった身体の変化・変調、精神的に変わっていくことについて、心のストレスにフォーカスしてページを割いている「学研」が丁寧で良いと思いました。不安や悩みについての充実度の他に、お酒やタバコ、薬物について「ノー」と言えるか、具体的にどのような断る手段があるかについてまで書いているかも見ました。その点も「学研」が良いと思いました。

- (岡野委員) ポイントとして「自分のこころと体と向き合う」「他者との違いを認識すること」「他者をいたわること」という視点があると思いました。

自分の心やストレスと向き合う視点は大事だと思いますが、その視点では「学研」が良いと思いました。自分の健康との関係の一方で、スマホやタブレットと健康とのかかわりが丁寧に書かれていました。

最近、がんについての教育も盛り込まれているようですが、その点も一番ページを割いているのが「学研」でした。その視点でも学研を推したいと思います。

- (教育長) 神奈川県教育ビジョンの中でもがん教育について触れています。ページを割いている「学研」が良いと思います。

(教育長)「学研」の意見多数を受け、各委員に体育の保健の「学研教育みらい」について諮る。

委員全員異議なし。

[外国語の英語について]

- (岡野委員) 英語のポイントは、良質の大量インプットで五感を慣らすこと、それを反復して身体にしみこませること、そして、それを自分で表現して人に伝えることだと思います。

将来、子どもたちが外国の方に二宮の道案内をすることをイメージして、道案内の単元を比べてみました。道案内をする時にその場면을きちんと想定出来るか、単語の羅列ではなく、場面に応じた意味のある英語を身体から出すことが出来るかということを見ました。

QRコードでアクセスした資料では、「光村」と「学図」が場面設定をよく出来ている印象を受けました。特に「光村」はスライドショーのようになっていて、臨場感あふれる場面情景が描かれていました。先生も子どもも、余計な説明をしなくても、その場面にすっと入っていける良さがあると思いました。ストーリーの流れもスムーズである点で「光村」「学図」の良さが際立っていました。

- (渡辺委員) 外国語をなぜ学ぶかという、言語を使ったコミュニケーションであり、異文化の相手や国についてお互いに知るコミュニケーションです。比較的「自分のこと、

日本のこと」を伝えることに重点を置いている教科書の方が多かった中で、個人的には「相手のことや国を知りたい」という視点が大事だと思います。その点で見ると「光村」「啓林館」「三省堂」が良いと思いました。

「光村」は「世界の友達」というワールドツアーが各教材に散りばめられていて、各国のことが学べるようになっています。

「啓林館」はジェスチャーの意味の違いなどがあって、外国ではこういう受け取り方をすると出ているところが良いと思いました。

それから「光村」ですが、4つの大切というのがある、**Smile、Eye Contact、Clear Voice、Response**と挙げていて、知識だけでなく気持ちの面がコミュニケーションで大切と伝えているのが良いと感じました。

- （山内委員） 各発行者とも力をこめた教科書になっているという手ごたえを感じました。二宮町は今までも英語教育に力を入れていて、充実していると思っています。今までは楽しく聞き話すということを中心に取られていますが、ここで教科書を選ぶポイントとして、読み書きの基本が押さえられること、正しい発音の基礎が身につけられること、将来困らない基礎力を身につけられるかということ、他の言語を学ぶ時にも応用できる基礎力が身につくと良いなという視点で見ました。また全体の作りについて、保護者や家族の方々が見ても各レッスンが分かりやすく、子どもが興味を持って先を学びたいと思った時に分かりやすくなっているかという視点でも見ました。「東書」「教出」「三省堂」の三者を推したいと思いました。

発音が分かりやすく、ゆっくり聞かせて正しい発音という配慮がされているのが「東書」でした。別冊があるので、扱いが現場ではどうでしょうかという心配はありますが、コンパクトで薄い、軽い仕様にされていることも評価したいと思いました。

「教出」は、文字の書き方が、丸三角四角で形を表されていて、とても分かりやすくなっています。最後にシールがついているので、子どもたちもうれしいのかなと思いました。

「三省堂」は表紙からして子どもたちが入りたくなるような表紙になっていると思いました。**QR**コードが語学の場合とても必要だと思いますが、発音がリズムカルで、繰り返し試してみても良いと思いました。

- （原委員） 小学校の英語の初めての教科書ですので、それぞれ興味を持ってみました。使われている英語が良いなと思ったのが「学図」と「光村」でした。「三省堂」も二宮町の中学校で長く使っていますが、英語の老舗という感がありました。検討会では「三省堂」が使いやすく内容量の程良さが評価されていて、その意見は大事にしたいと思いました。

改めて読み比べ、**QR**コードからアクセスする動画も見てみました。「光村」の英語は会話の流れがとても自然でした。一往復で終わってしまうような会話になりがちな教科書が多い中で、会話のキャッチボールがされています。日常会話でこういうシチュエーションあるだろうなという視点で描かれているところが良いと思いました。

検討委員会で、イラストについての意見もあつたと思いますが、「学図」と「光村」

はイラストに新しさを感じました。新しい教科をこれから学ぶよ、という印象があります。「三省堂」は使いやすいという意見でしたが、「お勉強」という感じがして、新しさをあまり感じませんでした。新しい世界に窓を開いていると感じさせる「光村」が良いと思いました。

しかし、一点問題かなと思ったことがあります。二宮のこれまでの外国語活動でゲームを中心にやってきていますが、それを見直そうという動きがあったと思います。「光村」の教科書は最後に「Let's play」というゲームをするページがあって、点数を競うようなものがあります。この展開はிரらないのではないかと思います。ゲームに代わるものがあると思いますので、「今までの二宮町での取り組みが活かされる使い方をするを教育委員会として指導をしてほしい」という意見を添えて、「光村」を推したいと思います。

- （教育長） 今までの二宮町の英語の取り組みも踏まえますと、やはりコミュニケーションだと思います。自分が話し、相手の話を聞くコミュニケーションの先には、ストーリー性、シチュエーションということ、きれいな発音を子どもたちの耳に聞かせることがあると思いますが、「光村」が良いと思いました。

「光村」でよろしいでしょうか。

- （山内委員） 発音にはこだわりたいと思いますが、「光村」も充実していますので、「光村」に同意します。
- （岡野委員） 先ほどのゲームの話ですが、「会話を聞いて行ったところを当てよう」というゲームでは「地名や土地に関係する英単語がどこに出てくるのか」と耳を研ぎ澄ませる必要があります。そのように意義のある形であれば、ゲームをやる必要性も高まりますし、先生方の運用でやっていけると思います。
- （原委員） 意味がある、学びに繋がるゲームと、楽しみで終わってしまうものがあるとありますので、教育委員会としてそのあたりをしっかりと示していただきたいと思います。

（教育長）「光村」の意見多数を受け、各委員に外国語の英語の「光村図書出版」について諮る。

委員全員異議なし。

〔特別の教科道徳について〕

- （山内委員） 各発行者とも力を入れて作られていると思いますが、じっくり見て行って、最終的には「光文」「日文」「東書」の三者が良いかなと思っています。

「東書」は質問の投げかけ方、発問の仕方が、私が子どもに見つけてほしいとこだわっている3点、「知識・技能の取得」「判断力・決断力」「協同・人間力・社会性」ということに重点を入れていると感じます。教科書のレベルがとても高いと思います

ので、扱う現場の先生にとって使いやすいかどうかは気になります。

「光文」が、「注意されたのに聞かなかったり、わがままにしたりするとどうなってしまうのでしょうか」という投げかけをしています。子どもたちへの投げかけを教科書がどのくらいまでして、導くかということで、「光文」の具体的な導き方が良いと思いました。道徳は、とても色々な考え方が交錯して、先生方の指導も、経験やキャリアにより色々な指導のやり方があると思います。教科書で具体性を持った方が私は良いのではと思いました。

「日文」は、学び方について、気づく・考えを深めていく・活かすという3つの流れが一番具体的で理論的な作りだと思いました。

○（岡野委員） 「東書」「光村」「学研」あたりが良いと思いました。

道徳の視点として、自分を見つめること、他者とどう付き合うかということ、社会とどうかかわるか、命の尊さという4点に留意しました。道徳は、答えのない課題にどう取り組むのかということが一番の課題だと思います。最後は、自分にとってあるいは相手にとって何がいいのか？社会にとって、どういう道を選ぶのが適切なのかを考えていく科目なのかなと思っています。

基本的に、設問は出来るだけシンプルでいろいろな考えが出せる構成になっていることが良いと思いました。「東書」は設問が一貫して控えめだと感じました。質問は多くて二つで、多角的にみて幅広く考えていける構成になっていると思います。

「光村」は、問いかけのレベルがふたつ設定してあって、まずは広く問いかける構成になっています。1年生の発問は簡単というか身近なもので、6年生と比べると、意図的に発問のレベルがギャップを大きく設定されているように感じます。見方によっては、成長を実感出来るだろと思います。

「学研」は、写真がダイナミックだということと、単元の記事や発問が未来志向になっていると感じました。

「東書」は、単元が実際にあり得る身近なものになっています。「雨の日のバス停」という単元は、「お母さんが怒って何もしゃべらない」というところで終わっていて、それを読んだ時、「なぜ」ということをちゃんと考えさせる構成になっていると思いました。一方で、自分の将来については、手塚治虫さんの話が載っています。大きな夢とか強い気持ち、自分が将来どうなりたいかということをも根本的に考えるような構成になっていて良いと思いました。

各発行者良いところがありますし「光村」と「学研」にも良さがあると思いました。が、設問がシンプルで階層が深くないという点で「東書」を一番に推します。

○（渡辺委員） 各発行者ありますが、「道徳の時間ってこんな時間だよ」ということが最初にあります。「あかつき」は、「様々な答えがあり、みんなで考え話し合い、自分を見つめる時間」と明記してあって好感を持ちました。選んでいる題材も良いと思いました。しかし、発問で「何々について考える」と枠がついていて、考える過程が

導かれているように受け取れ、授業の内容が画一化されるのではないかと思いました。発問の内容が大事だなと感じました。

「光村」「日文」「学研」は、世界人権宣言を取りあげていて、人権を考える題材として良いと思いました。

道徳は、自分の中で気づきが生まれるかが大事だと思いますが、授業の内容は、教科書から離れて話が広がっていても良いかなと思います。とすると、発問は控えめで子どもたちの意見を引き出せる方が、授業が広がると思います。そういう意味では発問が控えめな「東書」が良いと思います。

- （原委員） 昨年中学校の道徳の教科書を選ぶ際に確認されたのが、価値を押し付けないで、子どもたちの意見交換を通じてよりよい生き方を考えるということでした。そういう視点で読み比べて、誘導的な質問になっていないと思ったのが、「光村」「あかつき」「東書」でした。

光村は感動的な作品が多いが、比較的文章量の多い教材が多くなっています。国語では良いかもしれませんが、道徳では「感動だけではどうだろう？」と思いました。文章量の多さは理解に時間がかかり道徳としての学びの時間が少なくなると考えられます。

「あかつき」は、教材に少し古さを感じました。子どもたちの実生活に置き換えて考える余地が少なく、道徳的思考が教材の中で閉じてしまうと感ずます。また、「あかつき」は分冊がありますが、不評なようです。「分冊があるとそこにとらわれてしまう、分冊の内容を取り上げないといけないので縛られる」という意見が検討委員会ではありましたので、分冊はどうだろうと思うところです。

「東書」について、検討委員会で「良い意味でカラーがない」という意見がありました。それは道徳授業の本質に関わる大事な印象で、価値の押し付けでなく子どもたちが自分で考える余地があるということだと思います。そうはいっても教材ひとつひとつの発問にカラーがないわけではありません。ただ、教科書作りに関っている方の人数が他者に比べてとても多く、その結果固定化された価値観に縛られていないということなのかなと理解しています。

現在も「東書」を使っていて、指導について蓄積されてきたところだと思いますので、「東書」が良いと思います。

（教育長）「東書」の意見多数を受け、各委員に特別の教科道徳の「東京書籍」について諮る。

委員全員異議なし。

（教育長）各委員に、審議した結果を議案第13号として諮る。

委員全員賛成により、議案第13号は承認される。

また、ホームページへの公開についても了解を得る。

(2) 議案第14号 令和2年度中学校使用教科用図書採択について

(教育長) 令和2年度中学校使用教科用図書採択について、提案理由を説明。

(教育総務課長) 令和2年度中学校使用教科用図書採択の内容について資料に基づいて説明。

○(原委員) 検討委員会でのご意見を傍聴させていただきました。特に不都合はないということでしたので、継続して同じ発行者のものを使用してよいと思います。

(教育長) 特別の教科道徳以外については、現在使用している発行者を継続してよろしいか、特別の教科道徳については平成30年度に採択した「東書」を令和2年度も継続して使用するというのでよろしいか委員に諮る。

委員全員異議なし。

(教育長) 各委員に、審議した結果を議案第14号として諮る。

委員全員賛成により、議案第14号は承認される。

また、ホームページへの公開についても了解を得る。

(3) 議案第15号 令和2年度小・中学校使用学校教育法附則第9条 による教科用図書採択について

(教育長) 令和2年度小・中学校使用学校教育法附則第9条 による教科用図書採択について、提案理由を説明。

(教育総務課長) 令和2年度小・中学校使用学校教育法附則第9条 による教科用図書採択の内容について資料に基づいて説明。

意見等なし

(教育長) 各委員に、議案第15号について諮る。

委員全員賛成により、議案第15号は承認される。

また、ホームページへの公開についても了解を得る。

(4) 議案第16号 地域学校協働活動推進員の委嘱について

(生涯学習課長) 地域学校協働活動推進員の委嘱について資料に基づいて説明。

意見等なし

(教育長) 委員に議案第16号について諮る。

委員全員賛成により、議案第16号は承認される。

5 報告・協議事項

(1) ガラスのうさぎ像平和と友情のつどいの開催について

(教育総務班長) ガラスのうさぎ像平和と友情のつどいの開催について資料に基づいて説明。

(3) 小中一貫教育校設置計画案意見交換会について

(教育総務課長) 小中一貫教育校設置計画案意見交換会について資料に基づいて説明。

○(原委員) 説明会を2箇所で開催して、「これで終わって良いのかな」という思いがありますが、この先の展開について、いかがでしょうか。

○(教育部長) 今回は、第一弾として、小中一貫教育や町の考え方を御理解いただければ良いかなというところです。場所については議論をしていかなければならないので、第二段第三段の意見交換会をしていく必要があると思います。意見交換のやり方は、今回のような形だけでなく、地域の会合や役員会などに出向いて意見をお伺いするようなことも考えられます。未就学のお子さんの保護者のご意見をお伺いすることも必要だと思いますので、場を設けられるようにします。

今年度中に計画を策定したいという目安はありますが、その期限にこだわりすぎずに、丁寧に行っていきたいと考えています。

○(山内委員) 説明会ではなく意見交換会というネーミングが、今後も引き続き話し合っ
て行きましようという姿勢を示していて、そこがとても良かったと思います。参加した回
では、年齢の高い方が多いようでした。参加者の年齢層はどうでしょうか。この件に関し
て最も心配されているのは、まだ就学前のお子さんをお持ちの親御さんだと思います。そ
の年代の保護者さんに絞って説明する場も、シニアの方の「自分たちが子どもの頃はこう
だった」といったお話が聞けるような場も必要と思うので、様々な形での意見交換出来る
場があると良いなと思いました。

○(教育総務課長) アンケート33名の回答の内訳ですが、年齢が20代という回答はあ
りませんでした。30代40代が16名、50代以降の方が16名、無回答が1名でした。
30代40代の方はお子さんがいる方が多いだろうと推測しています。

対象のお子さんがいますかという設問では、中学生のみが2件、小学生のみが6件、

未就学のお子さんがある方が 3 件、小学生・中学生両方のお子さんがある方が 4 件、小学生と未就学のお子さんがある方が 5 件です。中学までのお子さんが「いる」が 20 件、「いないが」13 件で、お子さんがいるご家庭の方にもアンケートにはご協力いただけたかと思えます。

- （教育長） ご意見の中には、これから一番影響を受ける未就学のお子さんがある親御さんへの周知が足りないのではないかというものがあつたので、情報を出していなくてはと思っているところです。
- （原委員） 未就学のお子さんがある保護者への周知はどうだったでしょうか。幼稚園保育園を通して配付したほうが良いと思いますが。
- （教育総務課長） 今回の周知ですが、子育てサロン、町役場の子育て関係の窓口、お子さんが集まるような場所の広報掲示板にはポスターを貼る、チラシを置くなどしました。夏休みに入っているので、今すぐチラシを配布するのは難しいところです。未就学の保護者向けの意見交換会を行う時には、チラシを配るなどきちんと周知をしたいと思えます。

（4）その他

－ 次回教育委員会予定 －

（教育総務班長） 次回教育委員会議の日程及び出席を要する主な行事について説明。

（教育総務課長） 中学校体育連盟の大会成績と全国大会及び関東大会出場選手の表敬訪問予定について報告。

－ 傍聴者退席 －

5 報告・協議事項

（2）使用料の見直しについて

－ 非公開 －

12 時 28 分 閉会